

れるものゝ如し。一日相携へて、レゼントパークを散歩せる時の如きは、芝生の上に横臥しつゝ、彼れ諄々として妻子を語り、異境にある身の寂寞なるを告白し、『僕は殆んど毎日故國の妻に繪葉書を送りつゝ、あれども、妻に對して健在を祈るも氣耻しければ、近頃は唯だ郎子(彼の愛嬢の名)に宜しくとのみ書きつゝあり。蓋し斯くすれば、僕の妻に對する愛情をも包含し居ることを妻が感知し呉るゝが爲め也』と惚氣をいひ、更に我輩のニヤリ々傾聽し居れる顔を盜視して、『君は笑ふけれど、それは君に家庭を持ちし經驗なきが故なり。歸朝の後は、早速良妻を迎ふべし。その時始めて僕の心事を解すべし』と勸告し、果ては配偶選擇の注意迄も説教す。

歸途、日本料理店『生稻』に立ち寄りて晚餐を共にす。彼れ尙ほ依然として公園内の談話を繼續し、最後には野田義夫の妻君携帶なること迄も引合に出して、『一ヶ月略ぼ幾何の金あれば、妻を呼び寄せて共棲し得るや』を我輩に問ふ。我輩即ち所見を告げて、文部省より貰う金額のみにては、到底駄目なりと確答す。彼れ一寸首を傾け、『ナーニ、少々借金するぐらゐは厭はねど……』といひて餘程氣乗りしたものの如く見えしも、我輩俄かに揶揄を始めたるが故に、彼れ倉皇口を噤み、『止めたり、や

めたり、前言は一切取消すべきにより、歸朝の後今夜のことを素破抜くべからず』と懇望す。

其後、我輩の巴里にある時も、彼れ我輩に書を寄せて、『生稻にての冗談を素破抜くべからず』といひ、歸朝の後も同一の懇望を通じ來る。而して最近に於ては、更に一步を進め、『近頃は西洋の生活にも慣れ、毫も寂寞を感ぜず』といふ。然らば、巴里文明の真相に觸れしや如何。オランピアの舞蹈、カフェー、パンテオンの地下室の赤い酒や青い酒の趣き如何。曾て我輩より郎子(フキコ)さんに宜しくと申送りしことを傳信せしや如何。

右の外、教育思想に關係せる大學出身者少からず。藤井健治郎の如き、遠藤隆吉の如き、福來友吉の如き、速水混の如き、北澤定吉の如き、桑田芳藏の如き、野上俊夫の如き、上野陽一の如き、即ち是れなり。然れども此等の人は、社會學や、倫理學や、心理學の専門家なるが故に、茲には評論せざるを可なりとすべし。他日機を得て、詳細評する時ありと信ず。

教育學專攻の新進としては、尙ほ此外に龍山義亮、堀田相爾、河野清丸、木庄精次、入澤

宗壽、福島政雄等の數者あり。何れも未來に期待せらるゝ人達とす。

五八〇

丙、茗溪派の教育學的系統

一、野尻精一

野尻精一は播磨の人、萬延元年三月を以て姫路に生る。明治十五年東京師範學校師範學科卒業後、文部省御用掛を命ぜられ、夫より山形師範學校教諭、同縣中學校長等を歴任して、明治十九年獨逸に留學を命ぜる。歸朝後、高等師範學校教授に進み、東京府師範學校長に任じ、三十年十一月文部省視學官に任じ、四十一年奈良女子高等師範學校長に就任す。

彼は茗溪派出身の故參にして、又最も早く頭角を現はしたる者の一人なり。彼は幼時神童と呼ばれたるほどにて、學才に於て等輩を凌ぐのみならず、又事務の才に長じ、統率の徳器を有す。資性温厚にして、綿密周到なれども、稍決斷に乏しく、拙速に事を爲すに適せざる缺點あり。然りと雖も、氣概に富み、宛然古武士の風格を具ふ。

彼は二十三年以來數年間、高等師範學校及び帝國大學に於て、教育學を講述したる

ことあり。然りと雖も、當時に於ては、我教育界は未だ教育學研究に熱心ならず、加ふるにハウスクネヒト新に來朝して、漸く其聲名を博せる時にてありければ、學者としての彼の名は此等の事情の爲に左迄發揚せられずして止めり。

彼は學者としては既に過去の人に屬すと雖も、教育家としては尙ほ未來を有す。

我輩は彼の學識を取らず、才幹を取らず、唯だ彼の人物を取りて、常に之を推賞す。殊に女子高等師範學校長として、第一流の適任者たるを疑はず。

二、篠田利英

篠田利英は信濃の人、安政四年正月を以て松本に生る。上京して同人社に入り、中村敬宇の教育を受け、次で慶應義塾に轉じ、更に明治十年東京師範學校に入り、卒業後、群馬縣師範學校教諭となり、更に高等師範學校訓導に轉ず。十九年師範學科取調の爲、米國に留學す。二十三年業を修へ、スコットランド、和、獨、佛等の諸國を巡遊して、本邦に歸れり。直に女子高等學校教授となり、翌年新法令審査委員に擧げられ、次で附屬小學校主事を奉じ、二十六年文部省視學官兼女子高等師範學校教授に任じ、間もな

く視學官を辭す。

彼は澤柳政太郎の從弟にして、高等師範出身の先輩中にありては、兎も角學者的資質に富める人なりと公評せらる。是れ彼が同校の出身者中、比較的長く學者的生命を維持し、學者としての聲望を今日に保てる所以なり。然りと雖も彼や元來消極的にして著書を出さず、新聞雜誌に意見を公表せず、彼が教育學に對して相當の造詣を有することは、萬人の信じて疑はざる所なれども、彼の學說が何れの學派に屬し、彼の主張が那邊にあるやを知らざるもの甚だ多し。従つて彼が我教育思想界に及ぼせる影響も、亦決して多しとせざるなり。

彼は聰明伶俐にして温厚謹直の人、女子教育家としては最も適當なる性格を具ふ。今日に於ては、學者としての彼の時代は既に過ぎ去りたるの感無きを免れずと雖も教育家としては、尙ほ將來發展の餘地あるを想はしむ。相當に事務的才幹にも富み、處世術にも巧みなれば、一科を擔任する平教授よりも、部下を統率して一校を經營する學校長の方に適任ならん。嘗て奈良女子高等師範學校の新設せられたる當時、彼は其校長候補者に擬せられたる事ありき。そはたゞ風評に止りしと雖も、彼が將來

此方面に發展すべき適材なることは、我輩の信じて疑はざる所なり。

三、湯本武比古

(一)

湯本武比古は信濃の人、安政四年十二月を以て赤岩に生る。長野師範學校、松本中學校等に學び、後東京に出で、中村敬宇の同人社に遊び、次で東京師範學校に入學す。十六年中學師範科を卒業し、直に其助手に擧げられ、十七年文部省編修局に入りて『讀書入門』を編纂し、十九年東宮御用掛を仰せ付けらる。勤仕三年にして獨逸に留學す。皇族教育に關する事項及び教育學を研究し、十六年歸朝して學習院教授に任せられ、次で高等師範學校囑托教授となる。二十九年開發社々長となり、教育時論を主幹し、三十一年高等教育會議員に擧げらる。

彼は多才にして趣味多方なれども、一科の學問に對する造詣は、野尻と均しく、左迄深からず。彼の頭腦は明晰にして、文章亦普通以上に巧みなれども、學者としての修養は、篠田、黒田に劣れり。彼は獨逸に學び、泰西の空氣を呼吸したれども、其思想は寧

る保守的にして、ハイカラ臭毫もなし。彼が伊澤修二の推薦を得て、東宮御用掛となるや、毎日齋戒沐浴して之に奉仕し、鞠躬碎礪したりといふ。人或は之を以て、彼の人物を云爲する資料となすと雖も、これ思はざるの甚だしきものにして、我輩の取らざる所なり。我輩は寧ろ之を以て彼の人物の至誠堅實なるの證左となす。

彼が歸朝早々の出版に係る『新編教育學』は、一部ヘルバルト派の學説を採用したる所あれども、然も其大部分に於ては、教育勅語を援引解説し、其聖旨を體得せしむるを以て、教育の目的なりと主張したるもの、純乎たる學説を以て目すべからずと雖も、亦一種の着眼たるを失はず。彼は東洋倫理に關して相當の造詣あり。殊に日本倫理史に就て研究最も深きが如し。既に之に關する著書もありて、相當に好評ありと聞く。恐らく教育學の比にあらざらん。されば彼を教育學者として論ずるは寧ろ不穩當なるやも知るべからず。彼が當時名聲隆々として旭日昇天に似たる者ありしは、彼の主張したる教育學が學説として價值ありしが爲に非ずして、寧ろ當時我教育界に新人材乏しかりしが爲に外ならず。

彼、今や民間に退き、漸次教育學界と遠ざかれり。彼は現時開發社長にして、同時に

京北中學校長たり。傍ら帝國教育會の爲にも盡瘁す。人或は彼の貨殖の念に富むの故を以て、兎角の非難を加ふるものありと雖も、そは畢竟東洋流の偏見より來る妄評に過ぎず。蓄財は吾人が社會に出て、活動をなす上に必要なる第一の心得にして、處世の要道なり。凡そ人の世に處して、常に忘る可らざる心掛二あり。一は讀書にして、二は蓄財なり。若し讀書を怠らんか、頭腦荒み、思想枯渴して遂に俗物となるを免れず。蓄財を怠らんか、公人としての出處進退を潔くすること能はず、金錢の爲に節を屈せざるべからざるが如き場合に遭遇すべし。されば蓄財は賤しむべきにあらずして寧ろ譽むべきことなり。湯本が貨殖に心掛け、今日の地位を作りたるは、非難すべきにあらずして、其用意の周到なるを賞すべし。

(二)

彼、今や全く民間に沒したりと雖も、尙ほ教育家としての生命を有せざるにあらず。教育雜誌記者としても、民間教育者としても、第一流の地位にありといふを憚らず。

嘗て我教育界に隆々たる名聞を博したるものにして、今、民間教育者として知らるるもの、彼の外に色川冨士あり、岡五郎あり、田中敬一あり。何れも當年の元氣稍々衰

へたるを免れずと雖も、尙ほ教育社會に貢獻する聲望に乏しからずとす。色川は近藤眞琴の門下より出で、教育界の人となり、中學校長、文部省參事官等を歴任して、早くより頭角を抜く。其人霸氣に富み、氣概に富み、意氣に富み、高潔の志操に富む。常に力ある達辯を以て、侃々諤々の議論を上下するが故に、一見、圭角に富める野人の如く想ふものありと雖も、其實、心情甚だ優しくして、親族故舊に厚きのみならず、後進にも深く同情して、誘掖指導に努む。彼は權勢を恐れず、富貴に屈せず、唯だ意氣に感じ、肝膽相照する時、水火も尙辭せざる底の男性的眞骨頭を發揮して、一見の友にも一肌を抜く。彼は水戸學を體現したる好標本なりといふよりも、寧ろ純日本人の好典型なりといふに近しとす。岡五郎は、野尻精一、瀧澤菊太郎等と同期の出身にして、且つ、列頭の友なり。曾て中學校長、師範學校長等を勤めたることあり。東京府事務官、文部省視學官等を歴任したることもあり。而して今は富豪大倉喜八郎の教育顧問たる傍ら、帝國教育會の理事として、國家教育の爲に盡瘁す。人物穩健中正にして、着實眞摯、學者的の名望と功績とに乏しと雖も、教育の實務家として、茗溪派の先進として、社會的信用勢力に富む。

田中敬一は、岡よりも一年遅れて篠田利英と同時に高師を出でたる人なりと記憶す。中學校長、師範學校長、臺灣國語學校長等を歴任し、今、私立日本橋高等女學校に校長たり。傍ら帝國教育會に理事たること人の知る所の如し。

彼は學者的資質を有し、原書を讀む力も相當に有すと雖も、事務的才幹の一方に發達して、學才は十分の發揮を遂げずして止り。思想穩健、人物確實、天賦に於て相當に霸氣あるを隠見せしむと雖も、今や當さに老熟して、圭角消滅し、總てに於て岡五郎と略ぼ同型の人たるを想はしむ。

湯本は、色川、岡、田中に比すれば、官歴に於て稍々劣れども、民間教育者としては、同一彙類中にありて、互格の地位を占むといふを適當とせん。

四、黒田定治

黒田定治は、越後高田の人、文久三年十一月を以て其郷里に生る。明治十七年中學師範科を卒業し、二十三年福島縣會津中學校教務取調を囑託せられて、同校設立の事に盡瘁す。同年十月師範學科取調への目的を以て歐洲に留學を命ぜられ、英、佛、獨諸

五八八
國に在留する事三年にして、二十六年歸朝す。留學中高等師範學校教諭に任ぜられ、歸朝後教授に進む。

彼の専攻は實驗心理學にして、今日に於ては稍々時代の過ぎたる觀ありと雖も、歸朝の當時に於ては、本邦第一流の教育學者として名聲隆々たるものありき。

彼は頭腦明晰、學者的資質に於ては、篠田に優るとも劣らずと公評せらる。本邦に於ける單級教授の鼻祖にして、實地教授にも甚だ巧みなり。

彼は性質甚だ無邪氣、淡泊にして、しかも元氣に富む。嘗て山川浩が高等師範學校長たりし時、彼れ頗る山川に愛せられ、山川が地方に出張する時、必ず彼を伴へり。蓋し彼に幾分の軍人肌あり、大杯を傾けて豪語するあたり、何處となく、山川の性行と吻合するものありしが爲に外ならず。

彼れ今や地位漸く進み、霸氣も元氣も從つて衰へたるのみならず、年來の大酒は、彼の頭腦を荒ましめ、颯爽たる昔日の英姿を没滅せしめ了れり。加ふるに家庭の不幸は彼の意氣を愈々銷沈せしめたるが故に、到底當年の黒田を再び見ること能はずと雖も、然かも尙ほ腐つても鯛は依然鯛たるを失はず、彼をして一事に専らならしめば、

永い間には必らず何事をか爲し得る天品あるを疑ふべからず。殊に彼が親族知己に對する信義友情に厚く、私人として寔に麗しき性格を有する一事、我輩の最も推賞する所なり。

五、波多野貞之助

佐藤の次は波多野貞之助なり。波多野は茨城縣の人、元治元年を以て新治郡に生る。明治十六年東京師範學校に入り、二十年四月初等中學師範科を卒業し、直ちに茨城縣師範學校教諭に任ぜらる。後、高等師範學校教諭に轉じ、二十五年獨逸に留學を命ぜられ、師範教育及實業補習教育に關する事項を調査して、二十九年歸朝し、高等師範學校教授に昇進し、女子高等師範學校教授を兼任す。後、兼職を解き、高師教授専任となり、以て今日に至る。

彼は茗溪派教育學者の先輩の一人にして、大學派に於ける大瀨甚太郎の地位に相當す。従つて多くの書を読み、多くの事實を知れる點に於ては、到底、後進の乙竹、佐々木等の及び能はざる深みを有す。然れども彼は其多量の讀書を活用して、自己の創

見を開拓し、識見を向上せしむること能はず。可惜、有要の寶を持ちつゝ、徒らに寶の腐れに終らしめつゝあり。彼にして若し概括力に富み、創設の才に長せば、今日或は教育界最高の重鎮たるやも知るべからず。

凡そ學者と稱する者に、二種の差別あり。一は知識の學者にして、他は見識の學者なり。前者は多く読み、多く知りて、雜然と之れを貯ふれども、其知識に系統なく、統一なし。故に之を辭書的學者ともいふ。後者は讀むよりも思ひ、知るよりも考ふる人にして、絶えず分類し、觀察して、系統を立つることに努力す。故に之を思索的學者ともいふ。而して波多野は後者の模型にあらずして、前者の標本なり。

惟ふに波多野は、學者にして學者ならず。學者ならずして學者なり。其性格は、和平温乎にして、走角を有せず。其行動は平々坦々として一點の奇なし。縦横の機略も、潑刺なる才氣も、燃ゆるが如き熱情も、總べて此等のものは、波多野の具有せざる所なり。彼は事務的才幹に於て、小泉又一に及ばず、徳望に於て野尻精一に及ばず、發表力に於て、後進の乙竹岩造に及ばず、概括力と活用力とに於て、佐々木吉三郎に及ばざるなり。然れども、穩健にして熱心、正直にして努力するの美德は之を有す。満々たる

る覇氣も、行政的統御力も、圖々しき掛引も、總べて此等のものは、彼の性格の全然關り係らざる所なるが故に、熱心なる割合に效果舉らず、努力する割合に纏りの附かざる缺點はあれども、兎も角も、高師有數の勉強家にして、小心小膽、翼翼として過失なからんことを期する美點は之を有するなり。

彼、今、附屬中學校主事の椅子にあり。教授打合の爲、屢々職員會議を開く。偶々某甲職員の出席し居らざるを見れば、自らノコノコ出掛けて呼び出しをなす。然かも會議室に歸來して見れば、先きに出席し居たりし他の某乙職員、波多野の歸來の遲きを待ち倦みて、既に退出其座にあらず。波多野、復た再び自ら出馬して某乙を呼び來り、漸くにして職員の顔を揃へ、會議にかゝる。然れども、此時既に多くの時間を空費し居るべきが故に、眞の會議に費すべき時間は幾何もなし。従つて何等の議了をも爲し得ずして散會することも珍しからずと確聞す。

波多野が缺席職員を呼び出す爲に、自ら出馬する程の勞力を惜まざる熱心は甚だ嘉みすべし。然れどもそれが爲めに、無駄な時間を多く費し、却つて肝腎の仕事の進捗せざることに心付かざるは惜しむべし。缺席職員の呼び出し等には、給仕、小使を

用ふるも、充分用を辨じて不足なし。自ら出馬する必要毫もあらざるなり。

斯の如きは、ホンの一例に過ぎずと雖も、波多野の行り方は概ね此類なることを認めずんばならず。彼は校長(主事)のなすべき事にあらざる細故小事にも、幹旋盡力して、却つて大綱を逸すること稀れならず。これ彼が高師第一流の熱心家、勉強家なるにも拘らず、其割合に効果を收め能はず、非常に努力する割合に纏りを附け得ざる所以なり。

要するに、彼は大々的、正直屋の大々的、小心なる好々先生なり。然れども、彼の小心小膽は、其天性より來れるや否やは疑問なり。彼は學生時代稀觀の秀才にして、霸氣も氣力も相當にありて、仲々の快男兒にてありたりき。彼が歐洲に留學して彼地に滞留中の時、文部大臣井上毅が、『教育家は社會の實情に通ぜざるべからず』と言ふが如き意味の訓令を出したるに對し、彼が一篇の辯駁文やうのものを茗溪會の機關雜誌に寄せて、

『教育家が米鹽薪炭の時價を知らざればとて何かあらん。些々たる俗界の末事の如きは、精しく之を知らずとも、品性陶冶の大目的を果すに何の支障かこれあらん』

といふが如き主意を述べたる一事、彼が當年の元氣を髣髴せしめて餘りあり。然れども彼の此一文は、圖らずも文部省の忌諱に觸れ、就中時の文部省視學官川上彦次の癩氣にふれて、大眼玉を頂戴し、滿期歸朝するも容易に本官に任用せられず、暫く懸軻不遇の地位に置かれて、謹慎を嚴命せられたりき。是に於てか、波多野の元氣遽然として消衰し、大に鋒鏘を匿くして、柔順猫化を裝ふ。彼の小心翼々は、恐らく此時以後の習性なるべく、決して天賦の然らしむる所にはあらざらん。唯だ一度文部省に叱られて直ちに猫化したりといへば、甚だ彼が意氣地なしの如く見えざるにあらずと雖も、此方が却つて彼の聰明を立證するものなるべく、又彼の一生を通じて大なる利益たるべし。何となれば樋口勘治郎の如き境遇の人となるも、頗る考へ物なればなり。我輩は彼の大に發展し得ざるを言ふよりも、寧ろ彼の大過なくして教務に盡瘁せんとする態度を推賞せずんばあらざるなり。

六、樋口勘治郎

(一)

樋口勘治郎は信州の人、明治四年十一月を以て諏訪郡に生る。長野師範學校を経て、高等師範學校に入り、優良の成績を以て卒業し、同校訓導兼助教諭となり、次で教諭に進み、卅二年十一月、教育學及び教授法研究の爲滿三年間歐州に留學す。

彼が『統合主義教授法』と題する一書を著はして、名聲を始めて天下に擧げたるは、明治卅二年にして、ヘルバルト派の學説が種々の弊害を醸して、現状打破の新聲、徐々として我が教育社會の一隅にあらはれ來りし時なりき。

此の時に當りて、圖らずも彼の『統合主義教授法』は、時弊救済の先驅となりぬ。『統合主義教授法』は、世の所謂活動主義教授法にして、一言にして之を盡せば、兒童の積極的活動を尊重せよといふにあり。更に換言すれば、教育は兒童の心身を發達せしむべき者なれば、徒に兒童の活動力を抑制して、消極的形式的手段を取る可らず。教室内の靜肅も敢て不可なるに非ずと雖も、兒童本然の性質を顧みずして、大人に對す

ると同一の態度を保ち、兒童を拘束して、終には其個人性を没却する等の事あるべからず。教授は須く兒童をして積極的に活動せしむべく、活動せしめんには、先づ愉快に學修せしむる事につとめ、愉快に學ばしむるには、明瞭なる知識を與ふることを要す。然して明瞭なる知識を與ふる方法は、即ち諸教科を統一して、ヘルバルトの所謂多方の興味を喚起せしむるにあり。是れ彼が統合主義教授法の要點にして、其思想はパーカーの統合主義の教授説に淵源を汲める者也。パーカーの學説は其當時彼が崇拜したる所にして、高等師範學校卒業論文の如きも、即ち其學説を土臺として、起草したる者なりしといへり。

(二)

彼は才物也。既に然るが故に壯大沈重の所なし。一見磊落豪宕の性を具ふるが如しと雖も、其衷心を探れば、小膽小心にして眞に泰然不動の所なし。然りと雖も、彼は通常人以上の才氣を有するが故に、自ら此短所を隠くして、容易に人に見せず。表面飽迄も豪放磊落を衒ひ得るなり。我輩を以て直言せしむれば、彼は一の衒氣的偽惡者にして、眞の惡人たる程の惡度胸を有する者にあらず。さればとて又所謂善人

たる程の好々人物にも非ず。畢竟天稟の才氣を以て惡を装ひ、豪氣を街へる一種の弱き人物たるに過ぎざるなり。彼嘗て西洋留學の途に上らんとするや、神田明神の藝妓等、彼に向つて其行を送りて可なるや否やを問ふ、彼即ち之に答へて曰く「釋迦の將さに涅槃に入らんとするや、禽獸蟲魚悉く遠方より來りて、皆其死を悼みたりといふ。我今西洋に遊ばんとするに當りて、禽獸蟲魚に勝れる卿等之を送らんとす。何ぞ其不可なる道理あらんや」と。茲に於て妓等喜んで彼を新橋に送る。而も彼の先輩知己之を目撃して憤慨すること一方ならず、「神聖なる教育家の會離に、賤業婦を交らしめたるは、我等一般見送人を侮辱したるものなり」と稱へて彼を罵り、果ては彼を以て教育界に容る可らざる不品行者也と極言する者あるに至れり。

斯の如きは、寔に彼の僞惡者たることを能く表明せるものに非ずや。我輩は是を以て、彼が豪放を街ふ氣風の一端を現はせる適證なりとする者なり。蓋し教育家と雖も、木石にはあらず。酒樓に登りて妓を招き、一夕の快を貪るは、左、迄咎む可き事にあらず。又實際に於ても、絶對に之を爲さざる教育家斷じてあらざるなり。然りと雖も、之をなすには通常隱密の方法を用ふるを可とすべく、殊更に開放的態度を以て、

自ら吹聴する如き所爲をなすの必要毫もあらざるなり。少くとも普通の人にては、ある事をもなきが如く装ひて、表面だけは士君子を真似るを例とす。然るに樋口のやり方は全く之に反す。彼は當時尙ほ若年にして所謂「坊ちゃん」の臭味を脱せざる紅顔白面の一青年也。到底粹界の消息を會得して、賤妓を翫弄する程の手腕を有せざる也。然も彼の街氣にして奇を好むや、何等の關係なき者をも、唯面識あるの故を以て、敢て新橋に送らしむ、之を稱して僞惡者なりといはずして何とか謂はん。

既に於て彼れ佛國に至る。一日珈琲店にありて横井時敬等と共に珈琲を喫す。偶々一婦人來りて彼等に訴ふる所あり。其いふ所を聞くに日本人田中某なる者の薄情を難じて、果ては日本人全體を罵れるなり。彼之をききて、惻愷の情に堪えず。彼女を携へて日本人會に臨み、田中某に逢はしめんとす。而も其同伴の態度たる宛然として己の情人を携帶したるかの如し。此光景を目撃したる他の在留邦人、彼の大膽と厚顔なるとに一驚を喫したると共に、樋口は或意味に於ける豪傑なりとの風評、俄然として在留邦人間に鳴り渡る。而して幾許もなくし此事遂に本邦に聞え、主として『萬朝報』によりて摘發痛撃の筆禍に遭ふ。幸にして留學生を免ぜらるゝ迄

には至らざりしと雖も、樋口の醜名之より漸く高まれり。我輩後日彼に向つて事實の眞偽を訊す。彼即ち呵々大笑答へて曰く、『田中某に關する世評は、全く無根の事にはあらざれども、之が爲に醜聞を流さるゝ理由斷じてなし』と。我輩は固より本人の告白を全然信認するものにあらず。彼が極力非認したればとて遽かに彼の言を眞なりといふ者にはあらず。然りと雖も、我輩竊に思ふ。彼地に留學する者にして、全然暗黒面に入らせざるもの恐らくは一人もあらざるべしと。假令彼の如きあつかましき程度に於て之をなさざる迄も、隱密の裏に於ては、寧ろ却つて彼以上の大活躍を試みるもの、比々として概ね然らざるものなし。而も他の人の醜聞は、左迄本邦に聞えざるにも拘はらず、彼に於てのみ、群衆を超越するものあるは、これ偏に彼のやり方が、全然開放的にして、公々然之を遂行して毫も顧りみざるものあるに職由せずんばあらざるなり。然らば彼は何故に斯の如き事をなして顧りみざるや。是れ一に彼が豪壯氣宇を銜ひて、表面上の偽善をなさず、却て偽惡者を以て自ら偉しとする傾向を有するが爲めならずんばあらず。

彼の才は多方の才也。相當の學才を有すると共に、また社會的俗才をも有す。然

りと雖も、彼や元來誠實熱心の美德に乏しく、事物を打算し、人物を鑑識するの明を缺ぐ。これ彼が行く所として可ならざるはなきが如き才物なるにも拘らず、事實は行く所として不可ならざるはなき所以なり。

七、長谷川 乙彦

長谷川乙彦は尾張の人、明治三年九月を以て其郷里に生る。愛知縣師範學校を経て、東京高等師範學校文科に學び、二十八年卒業して、更に同校研究科に入る。學習院教授、高等師範學校講師等を歴任して、廣島高等師範學校教授に轉じ、現今其職にあり。彼は質朴堅實、學者風の人也。常に眞摯なる態度にて、熱心に研究して寸毫も倦まざるといふ。別に目立ちたる長處もなければ又短處もなく、最も特色に乏しき人なりといふを適評なりとせん。實直に過ぎて融通利かず、事務の才にも統率の手腕にも乏しければ、一科を擔任する平教授には適任ならんも、校長とか主事とかいふものは適せざらん。

八、森岡常藏

森岡常藏は若狭の人、明治四年二月を以て小濱に生る。廿五年福井縣師範學校を卒業し、翌年高等師範學校に進學し、三十年卒業す。直に高等師範學校訓導兼助教諭に擧げられ、卅二年教授法研究の爲、滿三年間獨乙に留學し、卅五年歸朝して間もなく高等師範學校教授に任ぜらる。後、文部省視學官に轉じ前職を兼任し、更に視學官を辭し、文部編修となる。

彼の『教育學精義』は、レーマンの教育説を主本とし、之に他の二三學説を參酌して論述したるものにして、折衷的教育説也。穩健中正なる點に於ては、恐らく本邦第一等の教育書なるべしと雖も、之と同時に平凡なる點に於ても、亦本邦第一等の教育書也。

又彼の『各科教授法精義』は、レーゲネルの教授法を其儘翻譯したるに過ぎざれども、所説精粹にして、論旨よく一貫し、好箇の教授法書たるを失はず。而して此二書は、彼の人物性格を最もよく代表したるものといふを得ん。

彼は溫良眞摯、善良人物の典型なり。事務的才幹も無く、策略もなく、掛引もなく、人物の規模も亦小なれば、衆人の上に立ちて、部下を統率し、事業を經營する地位には適せざるべしと雖も、人に使はれて編修事務に鞅掌するか、然らずんば、女子高等師範學校などに在りて、教授法ぐらいを擔任するには最も適任の人ならん。進んで事をなす技倆には乏しけれども、退いて失錯をなす危険性にも亦乏しきが故に、安心して相當の仕事を託するに足る。

九、乙竹岩藏

乙竹岩造は伊賀の人、明治八年十月を以て上野に生る。三重中學校を経て高等師範學校に入學し、卅二年其文科を卒業して、直ちに同校助教諭兼訓導となる。傍ら東京外國語學校獨逸語專修科及佛語科等に入り、卅七年教育學研究の爲め、獨逸に留學す。四十年歸朝して文部省視學官となり、東京高等師範學校教授を兼ね。四十二年に至り、專任高等師範學校教授となり、教育學を擔任す。

彼は佐々木吉三郎、樋口長市、齋藤斐章、石井國夫、馬上孝太郎、大橋銅造、前田捨松、東基

吉等と同期の出身にして、彼は其首席者なりき。

彼は頭腦明晰、學才に富み、又世才にも富む。故に視學官としても、學校長としても、必らず相當の成功をなすべき人なれども、自己の本領として任ずる所は、寧ろ學者として立たんとするにあるものゝ如し。

彼は高師出身の教育學者中にありては、學者として最も有望の前途を有する一人也。彼は中學卒業後、金澤高等學校に入り、中途退學して高等師範學校に入りたる者なれども、これ彼の爲には甚だ惜む可き事なりき。彼にして若し大學を出で居たりとせば、今日或は既に博士となり居るやも知るべからず。然らざる迄も將來必ず博士となる可かりしに違ひなし。

然りと雖も、彼の思想は未だ圓熟の域に達せず、尙ほ甚だ稚氣を脱せざる所あり。態度言行にも、態とらしき所あり、不自然なる表情あり。何處となく垢脱せざる嫌味あり。これ彼が人一倍に名譽心強く、何處迄も體面を重んぜんとする心掛あるが爲ならん。然れども理由の何たるを問はず、氣障と思はるゝ態度は、是非とも改めざるべからずとす。

彼は高等師範にありし時、教授谷本の愛顧を受けたりと聞く。彼の垢脱せざる態度は、谷本の感化を受けたる爲にはあらざるか。彼の學才は谷本に優るとも劣らず。今後の修養如何によりては、將來隱然として學界に重きをなすに至ること難きにあらざるべしと雖も、言行人格に於て、第二の谷本を以て目さるゝことあらば、彼の爲、誠に惜しむべき珠に瑾なりといふを得ん。

彼れ熱心勤勉、加ふるに精力甚だ旺盛也。歸朝後未だ四五年を出でずと雖も、『實驗教育學』『低能兒教育法』『新教授法』『穎才教育』等の數著あり。兎角の批評を聞くことなきにあらずと雖も、然かも皆な相當大部の著書にして、常人の企及し得ざる所とす。我輩は己れに拙らぬ著述をなせる經驗あるに願みて、彼の筆硯の頗る強健なるを嘆賞せずんばならず。

一〇、佐々木 吉三郎

佐々木吉三郎は宮城縣の人、明治五年十一月を以て其卿里に生る。宮城縣師範學校を経て、東京高等師範學校に入り、卅二年其文科を卒業す。次いで同校附屬小學校

訓導に任せられ、幾何もなくして教諭に進み助教諭を兼ねぬ。四十年教授法及び訓練法研究の爲め、獨逸に留學し、四十二年七月歸朝して、東京高等師範學校教授に任せられ、附屬小學校主事を兼ねぬ。

彼は才氣横溢の人也。頭腦の明晰と、學者的資質とに於ては乙竹に及ばざれども、活動的にして、機智に富める點に於ては、乙竹に優ること遠しとす。故に彼は乙竹の如く、教育原理を根本的に研究して、系統的、科學的に一家の學說を組織せんとすることに努めず、内外の最新學說を如何にして實際に應用すべきかを研究することに主力を盡くす。難解なる理論を卑近なる例を交へて通俗的に發表する事は、彼の最も得意とする所にして、教育社會の逸品也。浩翰なる大著述を讀みて、大要を摘み、之を僅々二三時間の談話に約説する如きも、彼れ獨得の妙技にして、彼は此點に於て殆んど天才といふも過言にあらず。歸朝後、彼が著したる『教育的美學』は、内外の諸說を集めて一丸となし、平易なる文章にて説きたるもの、彼の長所を遺憾なく發揮したるものといふを妨げず。

乙竹の頭は堅くして學者に適し、佐々木の頭は趣味に富んで通俗に適す。故に乙

竹は文部省視學官たるを好まず、附屬小學校主事たるを好まず、何處迄も學者を以て自ら任ず。強ひて主事たらしめんとならば、小學主事にあらずして、恐らく附屬中學主事が適任ならんと雖も、彼れ多分之を好まじ。佐々木は學理の實地應用者を以て任ずるが故に、一科を擔任する平教授よりも附屬小學主事が適任にして、現時に於ては恐らく天下の一品ならん。

佐々木は性甚だ快活陽氣、乙竹の氣障なく、森岡の姑息なし。彼が一杯傾けて酒興を催らし、十八番の阿房陀羅經を誦する時の如き、天真發露していふべからざる快感を起さしむ。彼は稍々威張りたがる性癖を有し、偉らがりたがる稚氣を有するが故に、往々先輩を凌ぐとの非難を受くと雖も、其等は要するに小瑕にして、洋々たる彼の前途を妨ぐる事由とならず。されど若し彼にして將來の大成を期せんとする野心を有せば、今少し主我を弱くして他人の意見を眞面目に聞くの態度を具へずんばあらず。

一一、樋口長市

樋口長市は信州の人、乙竹、佐々木等と同期の卒業也。彼は未だ廣く教育社會に知られず、乙竹、佐々木等の如く人氣を有せずと雖も、こは彼が著書を出さざるが爲に、して、必らずしも彼の實力の劣れるが爲にはあらず。彼は甚だ質實の人、機敏なる活動と、華麗なる色彩とに乏しと雖も、意志甚だ堅實にして、長き間には、必らず何事かを爲し遂げて、教育社會に寄與すべき人たるを疑はず。

彼は又温情親切、人の爲に勞を惜まざる美德を具ふ。世に信濃人の利己主義を云ふ者あれども、彼の如きは當さに其例外をなすものに外ならず。

一一一、三幅對の新進

未だ十分の名聲を有せざれども、將來有望を以て矚目せらるゝ、三幅對の新進あり。藤井利譽、佐藤熊次郎、眞田幸憲即ち是れ也。

藤井は福島縣の人、卅四年の出身にして、現任東京女子高等師範學校の主事也。

彼は風采素朴、色黒くして剛健也。學者として未だ其造詣を認めらるゝに至らずと雖も、英語も獨逸語も同一程度に讀み得る素養あり、將來必らず發達せん。然れども彼の本領よりいへば、學者的に微細の研究をなすよりも、事務の人、才幹の人、統御の人として、人の長たるべき人ならん。物解りよく、人に對して表裏を設けず、人間として相當に重みあるが故に、附屬小學校の主事として恰好の適材ならん。

佐藤熊次郎は宮城の人、藤井と同期の出身也。長野師範主事を經て、現任廣島高等師範附屬小學の主事たり。

彼は才氣喚發の人にはあられども、勉勵努力の美德を有するのみならず、左右是非を鮮明にせざるが故に、他と調和を保ちつゝ、一步々、必らず成功す。術數を弄して、一時に大功を樹つる怪腕なしと雖も、其代り何時迄經つとも失墜凋落の逆境に立つことあらざらん。威重あり、讀書力あり、關西初等教育界の重鎮たるに耻しからずとす。

彼の前任者は廣瀬爲四郎なり。廣瀬は統御の人、人に長たる才幹あれども、新研究の適材にあらず。附屬小學主事としては佐藤の方が適任ならん。

真田幸憲は秋田の人、藤井、佐藤と同期の出身也。高島高師の教諭を経て、今、奈良女高師の附屬小學に主事たり。

彼は才物にあらず、手腕家にあらずと雖も、頭に尊みを有する清き人なり。風采揚らず、一見粗朴の如く見ゆと雖も、學者的資質に富み、細事小故の研究にも適す。將來學者的に進むべき人ならん。

彼が廣島高師にある時、頗る赤木萬次郎庶務課長、即ち東京高師の幹事に相當する職の信用を受け、將に主事たるべくして遂にならず、奈良に轉じて始めて主事となる。人を惹きつくる政治家的資質に乏しく、事業を經營する手腕に卓出せずと雖も、着實なる研究、新らしき工夫を以て、將來必ず異采を放たん。

一三、爾餘の先進後進

右の外、教育學の専攻者として知られたる者に、小泉又一、横山榮次の二者あり。然れども此の兩者は既に『視學官室の人物』中に評論したるが故に、茲には説かず。

高師出身者中、教育社會に名を知られたる者を求めば、其數決して少しとせず。上

述せる人以外の主なる者のみ舉ぐるも左の數十者あり。

楡垣直右	小林義則	大東重善	丹所啓行	伊藤貞勝
町田則文	小西信八	山縣悌三郎	峰是三郎	丸尾錦作
豐岡俊一郎	尺秀三郎	甫守謹吾	三橋得三	山路一遊
中村五六	和田豐	土井龜之進	稻垣乙丙	御園生金太郎
鈴木光愛	堀義太郎	安達常正	廣瀬爲四郎	高橋章臣
川村理助	原龍豐	戸野周二郎	赤木萬次郎	生駒萬治
濱幸次郎	小林晋吉	小林盈	永井道明	川島庄一郎
高橋健自	吉田彌平	津田元徳	野口援太郎	山田禎三郎
小山左文二	峰岸米造	柴垣則義	根岸福彌	中村豐吉
櫻井寅之助	藤堂忠次郎	棚橋源太郎	矢島喜源治	三土忠造
寺内顯	石井國次	村上孝太郎	齋藤斐章	大橋銅造
服部教一	川上瀧男	市川源三	法貴慶次郎	山松鶴吉
鈴木庄次郎	佐々木秀一	峯岡信吉		

中に就て、尺秀三郎、高橋章臣、棚橋源太郎、馬上孝太郎、齋藤斐章等の數者は、教育學又は教授法の修養ある人として、評論すべきを至當とすと雖も、彼等は皆純乎たる教育學の専門家にあらざるが故に、茲には總べて省略すべし。

丁、獨立派の教育學的系統

一、能勢 榮

能勢榮は東京の人、嘉永五年七月本郷區弓町の自邸に生る。十二才にして杉原心齋に就きて漢學を修むる事約二年、後幕軍に従ひて、朽木、宇都宮の間に出没し、屢々官軍に抗す。維新後横濱に行き、商館の雇となりて英語を研究す。明治三年五月、彼が十九歳の時、布哇王國の領事、ヅハントに従ひて米國に渡り、桑港某商館の雇となりて夜間英語を研究す。偶々在米邦人佐藤桃太郎の紹介に依りて、バシフヒック大學總長マーシの知遇を受け、其家に寄寓して、オレゴン市トソラチン中學に通學す。苦學數年、明治五年六月卒業し、次でバシフヒック大學に進み、理學科を専攻す。明治九年六月卒業し、同九月歸朝す。歸朝後、岡山縣師範學校兼中學校教諭、學習院教授、長野師範學校長、福島縣師範學校長兼中學校長等を歴任し、十九年二月、森有禮に抜擢せられ、文部省書記官となり、二十一年三月、東京高等女學校教頭兼幹事に任ぜられ、劃策大に努む。然れども不幸品行上に關する中傷の毒筆に罹りて、其職を辭し、爾來民間に

あり。二十八年十二月病を以て卒す。

彼が佛人コンペイレの教育學を翻譯して折衷主義の教育說を唱道したるは、二十一年の頃にして、彼の最も得意時代なり。折衷主義は、實利的智育主義に偏せず、兒童の情意を陶冶して、人の徳性を涵養し、心意の開發のみを重んぜず、身體の發育養護をも怠る可らずと主張するものにして、實利一片の教育說に比すれば、學說としては多少完全に近きものと謂ふ可し。是を以て彼が一度此書を出すや、忽ち世の歡迎する所となり、師範學校は多く之を教科書となすに至れり。殊に當時は森有禮文部大臣の職にありて、訓育を尙び、體育を奨励したる時にてありければ、彼の此書は恰も好潮に乗じたる船の如く、多大の便宜を受けて、世に喧傳せらるゝに至れり。

然りと雖も、彼や元來獨創の人に非ず。明治二十年實利主義の教育說一世を風靡したる時に當りては、彼は米國流の教育學を翻譯して實利主義を唱道せり。彼の著『教育學』は即ちジョホノットの教育學を翻譯したるものに外ならずとす。而して時勢漸く實利主義に飽き、德育、體育の重んぜらるゝ時に至りては、彼又『根氏教育學』及『同教授法』を著はして、佛蘭西流の折衷主義を唱道せり。而して彼が森有禮に抜

擢せられて、文部省に入り、書記官の職に就くに及んでや、時恰も獨逸の學風に傾倒し、人道的德育主義の教育說大に世に行はれんとする時にてありければ、彼また獨逸の教育學を翻譯して道德主義を唱道せり。彼の著『ライン教育學』は、即ちヘルバルト派の道德主義を鼓吹したるものに外ならずとす。此外彼は『倫理學』、『管理術』、『德育鎮定論』、『虞氏教育學』、『實踐道德學』、『新教育』等、多くの著書を出版して、一時其名を天下に轟したりと雖も、翻て彼の著書に就て、其内容を檢すれば、皆盡く他人の學說を翻譯紹介したるに止まり、毫も自己獨創の學說を主張したる所あらざるなり。彼は不幸にして夭折し、世に持て囃されたる期間は、僅々六七年の間に過ぎず。而も此短き期間に於て、彼は態度を變ふること三回の多きに及べり。即ち始めは米國學風にかぶれて、實利主義を唱道し、中頃は佛國學風に心酔して、折衷的三育主義に變じ、後には德育主義に轉じて、ヘルバルト派の學說を紹介す。此一事は明かに彼が獨創の人にあらずし事を示すものにして、一家の見識を有する者の容易に爲し能はざる所なり。既に然るが故に、彼が種々の學說を紹介するに努めたる點は、聊か多とするに足るべしと雖も、未だ以て彼を學者と稱するには足らざるなり。

二、谷本 富

谷本富は讃岐國の人、慶應三年十月を以て高松に生る。明治十年高松中學校に入り、十一年高松醫學校に轉學し、醫學を修むるの傍ら獨逸語を研究す。在學三年首位を以て卒業し、更に伊豫松山に遊びて、漢籍文章を學修す。翌十五年笈を負ふて東京に上り、先づ中村敬宇の同人社に入りて英學を修め、卒業の後東京大學文學部選科生となり、二十二年卒業す。二十三年山口高等中學校教授となり、後、日高眞實の後を襲いで、東京高等師範學校教授となり、三十一年文部省視學官を兼ねぬ。三十二年秋、教育學研究の爲め、歐洲に留學を命ぜられ、英、佛、獨、瑞、埃、匈、和蘭の諸國を歴遊す。三十六年更に米國を視察して歸朝し、京都帝國大學文科大學の教授となり、文學博士の學位を受く。

彼が始めて教育學を研究したるは大學の選科在學時代にして、儲獨逸人ハウスクネヒトの講義を始めて聽きし者の一人なり。彼が卒業して山口高等中學校に職を奉ずるや、倫理科を擔任して、修身道德の道を講述す。偶々紛擾事件起り、漸く天下の

視聽を惹くに至るや、彼は率先勇退して京に歸り、嘉納治五郎に認められて、高等師範學校教授となり哲學史を講ず。此時代に於ける彼は、未だ年少氣鋭、學識甚だ深からず、其日々の授業の如きも、西洋參考書を携へ來りて、之を翻譯朗讀したるに過ぎず。何等獨創の説を吐けるに非ず、何等新觀察を示せるにも非ざりしなり。然りと雖も、彼れ素より凡愚の才に非ず。斯の如き講義をなす間にも、勉めて諸書を涉獵し、知識を蘊蓄せんことに勵みたり。彼が『實用教育學及教授法』、並に『科學的教育學』を出したるは即ち此時代にして、彼が始めて我教育界に知られたるも此時代なり。

彼は學才に富み、概括力と發表力とに長じ、演説も文章も相當巧みにして、當代教育學界の第一流者たるを失はずと雖も、人格、品性に於ては遂に士人の資格なきを、免れず。

彼嘗てヘルバルト提唱によりて、其聲名を揚げたる當時、東京市小學校教員の講習會に莅みて、教育學を講述したる事あり。然も其講習たるや、教員自らの發起に係らずして、谷本自身が、時の麴町區小學校長たりし多田房之輔に對して、講習會の開設を懇通し、併せて自己を講師に招聘せんことを内請したるによるものなり。彼當時多

田房之輔に向ひて曰く、『貴下若し教員を叫合して講習會を開催せば、我れ自ら進んで其講師たらん、然して各會員より徴收すべき會費は、成るべく低廉にし、人數を多く集められたし。出來得べくんば無料にても可なり。之が爲に余に報酬の贈られざることあるも、余毫も之を厭はざるなり』と。多田之を開きて大に徳とし、其好意を謝して別れたる後、八方に奔走して、漸く講習會を開き、會員五百名ばかりを集む。茲に於てか彼得々として教育學を講じ、盛況の中に豫定の會期を修ふ。會終るに臨んで、多田金拾圓を封となして、之を谷本に呈し、報酬のしるしとなす。彼之を開封して少額なるを憤り、『無報酬にても可なり』との前言を忘れて、却て多田等が彼自身を利用して金儲けをなせりと惡評す。蓋し彼の考にては、聴講料一人拾錢宛、總額五拾圓の收入あり。然るに其半額だも送らず。僅に拾圓を持參せるは、畢竟多田等が其私腹を肥せるに違ひなしと思惟したる者の如し。然りと雖も、翻て多田をして言はしむれば、彼は始め無報酬にても苦しからずと斷言したるが故に、我等は之を眞實の言として、講習會の開設に盡瘁し、各會員より徴收せる會費の如きも、僅に拾錢の少額に止めたるなり。之れ彼の希望に基くものにして、成るべく多くの會員を吸收せんとし

たるが爲に外ならざるなり。如何にも總額約五拾圓の收入ありしは事實なれども、講習會の諸入費を控除せば、後に残る所幾許もなし。彼に送れる拾圓の如きも、實を言へば苦しき所を無理に出せる薄謝也。我等争で之れに依りて金儲をなし得る道理あらんやと。然して之れより後、谷本と多田との間は、犬猿も管ならざる不和となり、今日に至るも尙未だ氷解せざるは、世人の夙に熟知する所なり。

彼が獨逸より歸るや、地方の教育界より其講演を求めたること屢々なりき。然れども、彼は其都度固く之を辭して應ぜざりき。人其理由を問へば、唯だ『聊か感ずる所あるが爲也』と答ふるのみ。聊か感ずる所とは何ぞや。想ふに文學博士の學位を授からんとする野心に外ならじ。蓋し功名に急なる俗物の彼にとりては、文學博士の學位は憧憬羨望措き能はざる所なればなり。

而も學位を受けんと欲せば、難駁なる著書を出すは、却て其障害となる虞あり。さりとして堂々たる名著を出すは、却々容易の事にあらず。これ彼が歸朝以來約三ヶ年間鳴かず蜚ばずの態度を持して、隱忍これ努めたる所以なり。聊か感ずる所とは即ち此點の思わくを指せるもの、これ以外に何等の理由をも有せざるなり。宜なる哉、

彼が愈々學位の授與を受くるや、爾來相續いで講習會にも出席し、著書をも續々刊行したることや。

彼が歸朝以來、始めて出版したるは、『新教育學講義』と題する一書にして、京都市教員講習會に於て講演したる筆記錄なり。幸に世の好奇心に投じて、相當の部數を出すに逢ふや、彼は之に續いて、『系統的新教育學綱要』『新教育者の修養』『日本文明史上に於ける弘法大師』『新教育の主張と生命』等の數書を刊行す。此等の書たる其題目にこそ、新の字を用ひてあれ、内容に於ては、さぞで嶄新の所はあらざるなり。殊に其何れの書たるを問はず、皆盡く雜然たる講義の筆記錄にして、未だ一も眞面目の著書を出さざる事は、世人の等しく不滿を懷く所、谷本の實力も多く推服するに足らざるなり。若し夫れ講習會々長の開會閉會の辭や、乃至は會員の謝辭、地方新聞の講習會に對する記事等を蒐録して、一には書籍の頁數を殖さんとし、二には己が講師たりし講習會が到る所盛況を極めたりとの事實を仄めかして己が人を吸引するの大さを世に示さんとする陋劣なる自己廣告の一事に至りては、人をして一見嘔吐を催さしむるものなりと謂ふ可し。

地方教育會の講習會に招聘せらるゝ東都の學者、皆口を揃へて谷本に頌徳表を上らんと云ふ。其理由を問へば、彼等又口を揃へて曰く、『谷本富が講習會に招聘せらるゝに至りてより、彼等講師たる者の報酬、遽然として暴騰したればなり』と。蓋し今より十數年前にありては、講習會講師の報酬は二週間五十圓前後を普通とし、其多き者に至りても百圓の上に出でざるが例なりき。然るに谷本が講師として招聘せらるゝに及んでや、斷じて斯る少額の招聘に應ぜず。少くとも參百圓以上五百圓を普通とし、多きに至つては千圓の巨額さへも要求する先例を開き、之が爲に一般講師の報酬標準を俄に暴騰せしむるに至りたるが爲めなり。若し地方教育會にして資力に乏しく、彼の要求する巨額の報酬を支出し能はざらんには、彼即ち一策を案出して招聘者に授く。其一策とは何ぞや。表面の報酬額は彼の要求通り五百圓乃至千圓に約定し、内其半額を彼より更に其教育會に寄附する事となし、彼の實際に受くる報酬は、其約定額の半額を以て之を承諾するの一事にあり。斯の如きは普通學者の到底爲し能はざる藝當にして、谷本特有の俗藝なりと謂ふ可し。

彼れ再度歐洲に遊ばんとするや、揚言して曰く、『苟も學者たる者は五六年毎に洋行して、泰西の新空氣を呼吸せざる可らず。然して既に地位進みたる故參の者は、成るべく官費出張を新進に譲りて、自分は獨力自費にて外遊し、修養を努むるの用意と覺悟なかるべからず』と。以て暗に這般の洋行は、自己の獨力なるかの如く吹聴す。然かも其實彼は多額納稅者伊藤某の通譯を兼ねて隨行したるものなること後に至りて判明し、新聞紙に於て心事の陋劣なるを嗤はれたりき。

彼が功名心強く、自己吹聴に努むることの例證其他にも乏しからず。乃ち彼が豪語して、『讃岐國は古來二人の偉傑を出す。前に孔法大師あり。現代に谷本富あり』と曰へるが如きは其一例に外ならず。彼、又地方教育會の講習會に赴く時、東京若くは大阪の新聞社に向つて、自己廣告の電報を打つことあり。假令ば『谷本博士、本日當地に來着す。地方有志家の歡迎盛にして、講習會は頗る盛會なり』といふが如き類なり。殆んど常人の想像だも爲し能はざる所にして、最も露骨なる自己吹聴の著例に外ならず。

とはいふものゝ、彼も一種の天才たるを失はず。碌々、學校教育を受けずして、兎も角も今日の地位に昇進す。固より凡庸者流の能くする所にあらざるなり。

彼れ短軀瘦身、風采頗る揚らずと雖も、才氣あり、着眼あり、氣焰あり、應用あるが故に彼にして若し大家ぶり、勿體ぶり、様子ぶる不自然にして、氣障なる態度を改むるに至らば、爾今數年の後、必らず學界に重きをなすべきを疑はず。

三、湯原元一

湯原元一、佐賀の人、元治元年八月を以て其郷里に生る。明治十三年東京大學豫備門に入り、十七年十一月卒業す。後教育學特約生となり、文科大學に入り、ハウスケネヒトに就て教育學を研修し、二十二年卒業して山口高等中學校教授に任じ、二十二年九月第五高等學校教授に轉ず。爾來宮崎中學校長、新潟縣中學校長、新潟縣視學官、北海道廳事務官等に歷任して、四十年六月音樂學校長に任ぜらる。

彼は疾くより『教授新論』『倫氏教育學』『教育學提要』『教育的心理學』等の數書を出して、教育界に其名を知らる。然りと雖も彼は智見の人、見識の人にして、知識の人、學究の人にあらず。彼は教育學を讀み、教育書を出したれども、世の所謂教育學者にあらず。孜孜として讀書に努むれども、一科の學問に關して深き造詣を有するに

はあらず。知らずといへば何事をも知らざれども、知れりといへば何事をも知悉せる人にして、政治の器なり。

彼れ今や老熟して圓満なる紳士の風貌を想見せしむる者ありと雖も、其天性には霸氣あり、氣概あり、膽力あり。毅然として侵すべからざる男子の眞骨頭を具有せり。彼の曾て山口高等學校にあるや、當時未だ年少氣銳にして、豪壯氣を負ひ、青樓に登りて大杯を傾け、眼中英雄を空しうしたること度々なりしといふ。然れども教務には甚だ熱心にして、學生に親切、殊に獨逸語の教授に最も巧みなりしといふ。彼の獨逸語教授をなすや、無味乾燥なる單語單句の解釋に甘んぜず、力めて文章全體の語勢と語調とを了解せしめ、之によつて文章の妙味と文學的趣味とを涵養せんとしたるもの、如し。當今文壇の驍將横山健堂は、當時山口高等學校の生徒にして、湯原の教授を受けたる者の一人也。横山曾て我輩に語りて曰く、『我が學生時代に最も感化を與へし人は、湯原易水先生なり。殊に文章に興味を感ずるに至れるは、先生の獨逸語教授與りて力あり』と。我輩も亦曾て彼の文章の莊重遒麗なると、見識の高邁なるとに敬服し、私かに湯原の如くならんと思惟したることあり。今日と雖も、尙ほ彼に對

する畏敬の情は少しも衰へずとす。人あり若し我輩に向つて、今日の教育社會中、何人を標的として修養するやと問ふらば、我輩は直ちに湯原元一なりと答ふるに躊躇せざる也。我輩は彼の今日の地位を貴しと思はず、欲し、と望まず。唯だ彼の人物、見識、手腕に卓然として時流を抜くものあるを嘆賞して措かざる者なり。

彼が今日僅に音楽學校長たるに止るは、畢竟彼に學歷なきに由る。學問識見、人物に不足あるが爲にはあらざるなり。彼にして若し大學出身者なるか、又は教育界に學問の弊なかりせば、彼れ恐らく、岡田、澤柳と同一の地位に昇り居らん。

彼の本領は、教育家たるよりも行政家たるにあり。行政家たるよりも政治家たるに一層適す。彼にして若し十年前に教育界を去つて議政界に入り居たりせば、今日恐らく政黨幹部員の一人なるべく、十年の後或は大臣たるに至るやも未だ知るべからざりしなり。

我輩、今の教育界に多くの希望を有する中に、湯原を擧げて普通學務局長たらしめ、たしとする一事あり。頃日、志士峯間鹿水來る時、談偶々湯原のことに及んで、此意を漏らす。鹿水衷心より賛同の意を表して、『人は未だ心付き居らざれども、若し然る

辭令の發表あらば、何人も成るほどと、首肯して天下一人も不評を立つる者あざらん』といへり。知らず、田所次官に進みたる時、此選任果して實現せらるべきや否やを。

彼の文章は氣韻に富み、格調高く、所謂臺閣の文なり。澤柳も谷本も、文章に於て教育界有數の人なれども、湯原に比すれば遜色あるを免れず。加ふるに思想雄健、論旨堂々、小問題を論ずるには適せざれども、大事の綱を論ずるには現代稀觀の大筆なりといふを妨げず。而して彼の人物は、當さに彼の文章の人格化したるものに外ならずといふを得ん。

四、稻垣末松

稻垣末松は三河の人、慶應二年一月を以て其郷里に生る。愛知縣中學校、大學豫備門を経て、帝國大學文科大學に入り、特約生となりて教育學科を卒業す。其間教育學をハウスクネヒトに學び、傍ら英語、歴史等を修業す。二十三年、栃木縣中學校教諭となり、次で東京府中學校教諭に轉ず。それより新潟縣師範學校教諭、島根縣第一中學

校教頭、滋賀縣第二中學校、愛知縣第二中學校長等を歴任して、八年九月之を辭す。後、文部省歐米教育事情取調囑託となり、慶應義塾大學及東洋大學講師となる。『近世教育學』、『教育學要義』、『モイマン實驗教育學講義』等の著あり。

彼は未だ彼の學識を傾倒せる著書を出さずと雖も、歐米の諸書を涉獵して、常に新の思想を本邦に紹介せる人たることは、萬人の等しく認むる所、彼が明治教育史上に其名を留むる所以も、亦主として茲に存せざんばならず。彼は學才に於て谷本に劣り、統率の才幹と政治的識見とに於ては湯原に劣る。かるが故に文部省の留學生ともならず、又直轄學校々長とも亦ならず、僅に第二流以下の中學校長たりしに止まるなり。然りと雖も、篤學にして終始研究を怠らざることは、萬人の厚く信じて疑はざる所、此點に於て谷本富に一步を進むるやも知るべからざるなり。其名聲の谷本に比して及ばざるものあるは、彼が谷本の如く自己吹聴をなさず、谷本の如く、多くの著書を出さず、又谷本の如く、精彩の文章と、輕快流暢の辯舌を有せず、而して谷本の如く、發表的心理上の長技を有せざるが爲なり。されど其蘊蓄の多寡と、造詣の深淺よりいへば必ずしも谷本に比して劣れりと斷定するを得ざるなり。彼が文部省留學

生たらざるは、恐らく彼の學歴が禍ひする者なるべく、彼の學力が留學生たるに不足するが爲にはあらざるべし。所詮彼は隠れたる學者なり。校長たるに適任ならず、教育行政官たるには尙更に適任ならず。唯だ吃々として書齋場裡に東西の學者と語る。是れ彼の最も適する所なり。

五、石田新太郎

彼は慶應義塾の出身にして、現在同校の幹事たり。教育學に興味を有し、絶えず研究す。二三年前米人の『教育史』を翻譯して、大日本文明協會より出版したることあり。最近には『天化人育』と題する一書を公刊したり。此の書は在來の教育學書とは、全然其形式を異にせり。即ち心理學、倫理學、社會學、歴史、自然現象等に關する知識を融合消化し、之を根柢として一家の教育意見を述べたるものにして、著しく獨創に富み、渾然たる思想の產物として見る可き點甚だ多し。從來の所謂教育學としては、形式的に價值乏しきを免れずと雖も、教育の想念を養ふ上には、却て從來の教育學よりも遙かに優るといふを妨げざるなり。

彼は又行政的才幹にも富み、總督寺内の信認深しと聞く。先年拔擢せられて朝鮮總督府の視學官たりしは之が爲也。彼が單純なる學究者にあらざるべきは此一事に徴するも明也。我輩未だ其人を見ずと雖も恐らく湯原型の人ならんと信ず。

六、立柄教俊

立柄教俊は越後の人、僧侶より身を起して小學校の教員となり、文部省中等教員教育科の免許狀を受く。後、中島半次郎等と共に、高等師範學校研究科に入りて教育學を修め、更に東洋大學に於て、谷本大瀨等につき教育學を研究したりといふ。

彼は僅に高等師範研究科を卒業したるのみにして、別に學歷を有せず。全然獨學自修のみによりて今日に至れり。英語も獨逸語も獨學なることいふ迄もなし。

彼は行政的事務的才幹に乏しきが故に、學校長たり、主事たり、經營者たるに適任ならず。純乎學者風に發展すべき人ならん。聞くならく、彼は深くヂーステルウエツヒに私淑すと。ヂーステルウエツヒは、ベスタロッチの門弟にして、師範學校に始めて附屬小學校を設けたる實際教育者なることは記する迄もなし。彼がヂーステル

ウエツヒに私淑するは、彼の性格がヂーステルウエツヒのそれに吻合する所あるが爲めにはあらざるか。風采脫俗的にして、態度に隱遁者風の所あり。

彼れ近時、朝鮮總督府に聘せられて其編輯官となる。恐らく曾て青山師範の附屬小學主事たりし時よりも適任の好評を博するならん。

七、中島半次郎

中島半次郎は熊本の人、早稻田専門學校の出身にして、在學中、中等教員教育科免許狀を受く。卒業後、開發社に入りて『教育時論』の記者たりしことあり。後、高等師範學校研究科に入りて、教育學を研究す。

著書に『教育學要義』、『東洋教育史』、『西洋教育史』、『獨逸教育見聞記』等あれども、何れも彼の造詣を傾倒したるものにはあらず。

彼は着實眞摯の人にして、秩序的に計畫を立て、一步々々發達す。彼の清國にある間、節約蓄財を旨として、歸朝後獨逸に留學せる如き、之を證して餘りあり。

彼れ現時早稻田大學に講師たり。而して最近教育研究部を創設して、門下生と共に

に教育學の自由研究を試むといふ。かゝる計畫の教育界に必要なはいふ迄もなきことにして、當然の仕儀よりいへば、高等師範學校又は大學等に於て既設し居るべき筈のものなれども、官立學校には諸種の情實ありて十分の研究出來ざる故に、寧ろ何等の拘束なき早稻田の如き所に於て之を行ふは、學界を裨益すること却つて多からんと信ず。

要するに彼は純乎たる學者として發展すべき人にして、將來有望の人なりといふを得ん。

八、爾餘の先進後進

右の外、教育學專攻者にあらざれども、教育思想に深き關係を有する人少からず。

中島力造、元良勇次郎、中島徳藏、山本良吉、渡邊龍聖、高島平三郎、宮田修、中島泰造、岡田五菟、川合貞一等の如き是れなり。

中島力造は大學教授、倫理學界の耆宿なり。道德教育に就て貢獻する所少からずとす。元良は心理學界の泰斗、大學教授の典型なりしに、先頃物故したるは惜しむべ

し。中島徳造は小學校教員より身を起して今日に至れる篤學者なり。東洋大學講師たる傍ら、丁酉倫理講演集を主宰しつゝあり。修身教授に寄與すること多しとす。山本良吉は東大選科の出身にして、今、京都大學學生監兼第三高等學校教授たり。爲人、謹直方正にして英國風の紳士なり。稍清^{ピュリタニク}教徒的性格を有するが故に、多少融通に乏しく窮屈なる所はあれども、熱心勤勉にして且つ人格高し。學生監には最も恰適の人ならん。著書に『中學教育の研究』あり。倫理教育に造詣深し。

渡邊龍聖は米國仕込の人、曾て倫理教育に關するの著述をなしたることあれども、其影響さまで大ならず。今、小樽高等商業學校の校長たり。高島平三郎は小學校教員の出身にして、獨學自修にて今日に至れる人、兒童心理學に就ては、本邦現時の第一流なり。未だ其人を見ずと雖も、熱心努力、精力絶倫の人なりと聞く。女子大學及東洋大學の講師たり。宮田修は早稻田の出身にして、雜誌『教育學術界』の創刊委員なりき。思想豊にして意見に富み、倫理教育及女子教育に一家の見を有す。

中島泰造は、渡邊龍聖と同じく米國仕込の人なり。心理學を研究すといふと雖も、頭腦不透明にして、造詣亦頗る怪し。彼を擧げて中島力造及中島徳藏と并稱し、所謂

『三中島』の一人となすは素人評の甚だしきものにして、我輩絶對に之を取らず。力造も徳藏も恐らく不満とする所たるを疑はず。

岡田五菴はハウスクネヒトの門弟にして、谷本と同期の出身なり。學者的仙人風の人にして、俗氣なく、名聞なく、高潔君子の俦を具ふ。學問才氣に於て、谷本に及ばざれども、人格に於ては遙かに優る。彼は教ゆる人にあらずして、感化の適材ならん。

川合貞一は慶應義塾の出身なり。専攻は哲學なれども、教育にも趣味を有し、且つ之を研究す。頭腦明晰篤學にして將來に富む。曾て佛英に留學し、獨逸を巡察して得る所少からず。歸朝後慶應文科に教鞭を執る。學者風の人にして、世才、俗才の人にあらずといふ。早稻田の中島半次郎に相對する人ならん。

人物
評論
學界の賢人愚人終

大正二年二月廿一日印刷

大正二年二月廿四日發行

人物
評論
學界の賢人愚人

定價壹圓八拾錢

著作
兼
發行者

東京市本郷區駒込千駄木町五十七番地
藤原喜代藏

印刷者

東京市京橋區南小田原町二丁目九番地
中野鏝太郎

印刷所

東京市芝區愛宕町三丁目二番地
東洋印刷株式會社



發行所

東京市本郷區千駄木町五十七番地

文教會

發賣所

東京市神田區小川町十八番地
振替口座東京一四一四六番

大野書店

冷泉藤原喜代藏先生著 (好評忽再版)

大英國の教育

菊判全一冊 定價金三圓
總クロス製 紙數約一千頁 郵税金拾四錢
東京市本郷區千駄木町五十七番地
發行所 文教會
東京市神田區小川町十四番地
販賣所 大野書店

獨逸式教育の萬能論に中毒したる者は本書を讀め！ 法治的、官治的、劃一的、純理的、空論的、獨逸一
天張りの教育論に飽きたる者は本書を讀め！ 教育上の地方分權、民治制度、非劃一主義、不統一主
義を知らんとする者は本書を讀め！ 人物本位主義、常識涵養主義、天才擁護主義、實用主義の教育を
知らんとする者は本書を讀め！

評批の湖江

▲文學博士吉田熊次氏曰く「明治教育思想史」の著者として我が教育界に名譽高き藤原喜代藏君は今又「大英國の教育」の大著を公にせり。余先づ前著を讀んで君が獨創の見識に服せしが今や後著を讀んで益々君が學才の非凡なると精力の絶倫なるを感服せざるを得ず。英國の教育に關する著書は英國にありてはバレーフォードの著「佛國にありてはレクレールの著なり」と雖も之を君が大英國の教育に比すれば及ばざるも遠し。先づ其分量よりするも前者は三百頁に足らず、後者は三百六十頁に過ぎず。然るに本書は實に九百頁を越ゆ。且其内容を檢するも、獨り其範圍の廣況なるのみならず又其研究も甚だ精細也。我が教育界に斯る良書有するに至りしは實に我等の幸福にして又實に我等の誇とするのみならず此書を讀みて最も愉快に感ぜしは文章の流暢なること評論の廣大快活なることあり。君の明治教育思想史は人なるして樂し余の讀み終らしめしが如く、本書もまた人をして樂しむべし。英國の教育を學ばしむ、又其評論は動もせず、痛切なる教育訓といへし。教育界は之を最近十數年來の著書中の最有益のもの、一と斷言し、又將來もその生命のあるもの、否あるべきものと保證するに躊躇はしない。教育界の爲め感謝の外無之候（私論）
▲女教師教授下田次郎氏曰く「最も特色多く最も調査に困難なる英國の教育に關し、斯く迄精細にして系統的なる著書を物せられたるは我教育界の爲め感謝の外無之候（私論）
▲萬朝報曰く「總論、初等教育、中等教育、大學教育、實業及藝術教育、師範教育の六篇に分ちて、特色ある、しかも從來あまり紹介せられざりし英國教育の全體に就て最も忠實なる研究の結果を發表したるものにして、着眼廣闊、記述秩序あり、加ふるに一家の批評を以てしたれば、現下英國の教育制度の長短得失を指すが如し、純理主義によりて養はれたる我が教育社會の頭は、この書を一讀することによりて多大の刺激を受けざらんとするも得ざるべし」

先帝の御遺著とも謂ふべき勅撰經史

宮内省御藏版 勅撰國民幼學綱要

再版出來 菊版布裝 定價金壹圓五拾錢 郵稅內地拾貳錢
△日本開關以來唯一の勅撰修身書
△勅命により全國の小學校に配附
△先帝の一等侍講元田永字先生の撰
△國粹道德の結晶、國民美德の基準

宮内省御藏版 勅撰三千大政紀要

四版出來 菊版布裝 定價金壹圓六拾錢 郵稅內地拾貳錢
△日本及日本人曰く「岩倉贈太政大臣が先帝の勅を奉じて撰修せるものにして、曩日南北正閏論の囂然たりし時に、正論家の典據とせしより、驟に世人の本書を崇仰することとなりしかば、今更に重刊せらるに至りしならん、固より崇仰すべき勅撰の書なれば、重刊乃至千萬刊して國民の襲藏に便すべきものなり」

◎ 史經撰勅大二皇天治明 ◎

教育勅語の淵源、帝國憲法の根柢

謹刻所 會教文 本郷千駄木七番
發賣所 大野書店 神田區小川町一四一八番

8.9.5

IF 4W39

32

終

